

農林水産大臣賞受賞

住民の絆で育む都市近郊農業の「湧水の里」

まさきちょうなかがわらしゅうらく
受賞者 松前町中川原集落

えひめけんいよぐんまさきちょう
(愛媛県伊予郡松前町)

■ 地域の沿革と概要

愛媛県伊予郡松前町は、愛媛県中央部の道後平野の南西部に位置し、北は県都松山市に隣接し、西は瀬戸内海の伊予灘に面している。総面積は20.07k㎡（東西7km、南北4km）で、標高は0.4～20mで起伏のない平たんな地域である。年間平均気温は15.8℃、年間降水量は1,300mmで特に夏の降水量が少なく、温暖な瀬戸内式気候である。

同町の総販売農家戸数は794戸、うち専業農家220戸、第1種兼業農家87戸、第2種兼業農家487戸である。

町内の経営耕地面積774.75haのうち704.97haが水田であり、県内でも典型的な2毛作地帯である。



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

中川原集落は、松前町の東部に位置し、一級河川・重信川を挟んで北は県都松山市に隣接する都市近郊型農業地域である。集落と松山市を結ぶ県道には「中川原橋」が架かり、交通量が多い。

集落の総面積は171ha、耕地面積86ha（水田85.7ha、畑0.3ha）耕地率50.4%（H22：愛媛県9.2%）で、主要品目は水稻（54.6ha）、麦（11.6ha）、エダマメ、ブロッコリー、ソラマメ、レタスなどの露地野菜（15.8ha）である。重信川に隣接しているため、伏流

事項	内容	
地区の規模	1集落	
地区の性格	地縁的な集団	
農家率 (内訳)		25.8%
販売農家数 (内訳)	総世帯数	415戸
	農家数	107戸
	専業農家	23戸
	1種兼農家	11戸
	2種兼農家	52戸
主要作物 (農業産出額)	水稻	73.0(百万円)
	裸麦	4.8(百万円)
	野菜	48.4(百万円)
農用地の状況 (内訳)	耕地計	86.1ha
	田	85.8ha
	畑	0.3ha
	樹園地	
	耕地率	50.4%
	農家一戸当たり農用地面積	0.80ha

水が豊富であり、緑豊かな水田地帯が広がる。地区には、伏流水が湧きだしてできた「ひよこたん池」があり、集落のシンボルとなっている。



写真1 ひよこたん池

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 農業生産基盤の移り変わり

中川原集落は、江戸時代以降、伏流水の豊富な農村として基盤を築き上げてきた。

しかし、戦後の高度成長期、農業より収入の高い他産業に就職する子弟が相次いだ。若者の就農者が少なくなった同集落では、農業者の高齢化とともに、農業を止める農家が増えてきた。

こうした農家の農地は、地縁農家が委託を受けて耕作してきたが、委託面積の急増に伴って組織化が必要となった。

また、地域の水田農業を守るために、集落が一体となって農地を守る意識を醸成する必要があった。

イ 生活様態の移り変わり

県都である松山市に隣接し、その地価の安さからベッドタウンとして注目され、非農家世帯の流入が進み、農家と非農家の混住化が進んだ。

そのような中、集落では自治会活動の低下や、水路・池の汚れや水田へのゴミの投げ捨てが目立つようになった。

集落の環境は自分たち自身で守る、という住民意識の向上が必要であった。

(2) むらづくりの推進体制

中川原自治区の住民415戸のうち7割強となる308戸は非農家である。

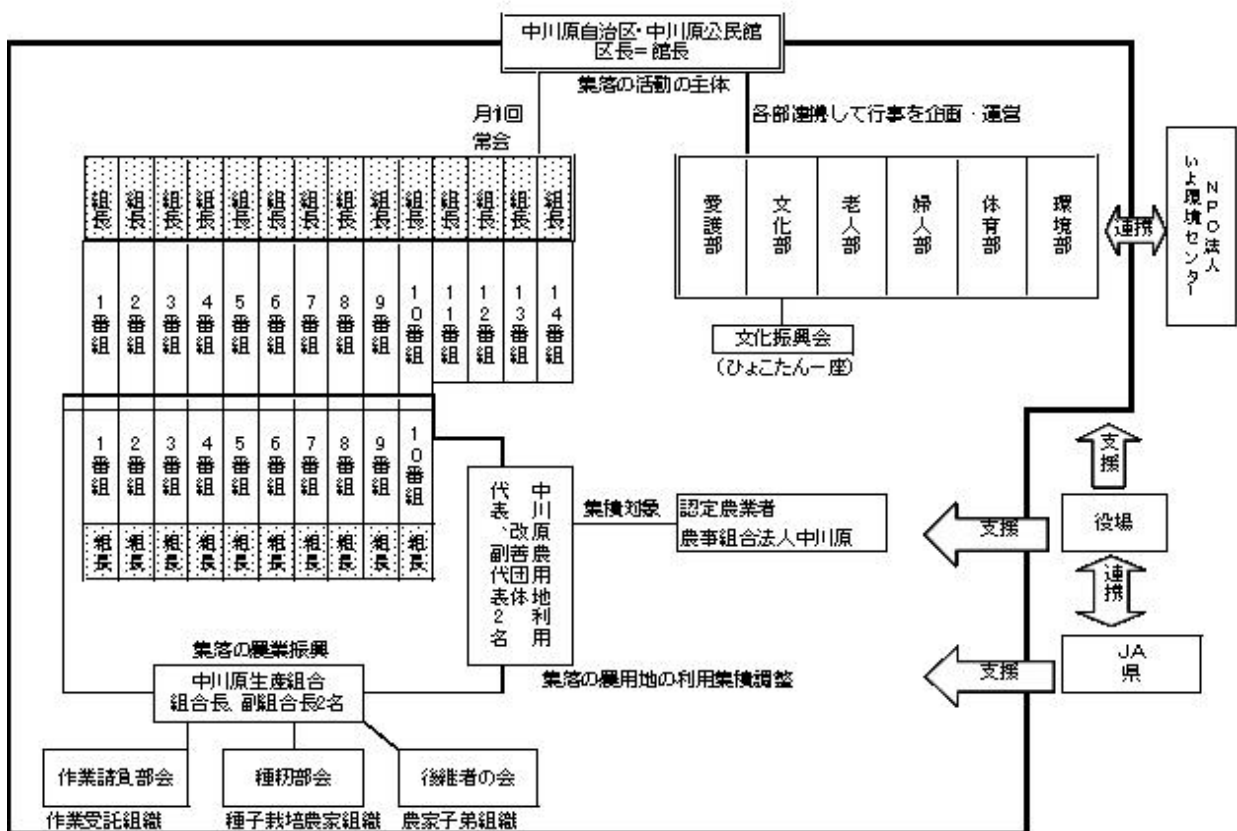
都市部から転入してきた非農家は、農村における近所付き合いや集落活動への参加を敬遠する傾向にあり、自治会へ加入しない者もいた。

このため、自治区では、地区分けで構成する従来からの10の組に加え、地区分けをまたいだ新規住民(95戸)だけで構成する4の組を新たに設け、自治会活動に参加しやすい環境を整えている。自治区は、14の組、愛護部、文化部、老人部、婦人部、体育部及び環境部で構成されている。環境部は、ひまわり栽培とリサイクル活動においてNPO法人いよ環境センターと連携している。

農業面では、昭和57年に中川原生産組合を結成した。

さらに、農事組合法人中川原と中川原農用地利用改善団体を平成20年に設立している。自治区の各種行事は、中川原生産組合や農事組合法人中川原とも連携して行われている。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

県都松山市に近接する都市近郊で、転入世帯の増加する中、農家が主体となったむらづくりがなされている。

集落全農家が参加する中川原生産組合は、優良な水稲、麦の種子生産を行うとともに後継者の育成をしている。また、農事組合法人中川原は、農地を利用集積し、環境保全型農業の取組と転入世帯等への米の全量予約販売により、次世代へ水田農業を受け継ぐ体制を構築している。

湧水の流れる美しい農村環境を守るため、集落をあげてゴミの45種類に及ぶ分別・回収を行うリサイクル活動や種油をバイオマスとして活用するひまわり栽培が行われている。さらに、子どもを主役とした各種行事や村芝居「ひよこたん一座」の活動を通じて、転入世帯との新たな絆を結んでいる。

2. 農業生産面における特徴

中川原集落は、水田経営が主であり、水稲、麦栽培を中心とした経営を確立するため中川原生産組合を中心に活動を展開している。また、平成20年に設立された農事組合法人中川原は、地域の水田農業の担い手として活動している。

(1) 中川原生産組合(構成員:86人)

高齢化と他産業に就業する農家子弟の増加で担い手の確保が難しい中、自治区の常会で、耕作放棄地を出さない方法や調整役、担い手の育成について検討を行った。

その結果、全農家が参加する中川原生産組合を昭和57年に設立した。

昭和62年～平成4年には町単独事業を導入し、集落内の農地の集約や農業機械の共同利用など基本的な集落営農に向けた組織づくりに取り組んだ。

以降、種粃部会、作業請負部会、後継者の会等の下部組織を設置している。

ア 種粃部会(部会員:19人)

気象条件が米麦栽培に適し、高品質な種子が安定して生産できる当地域(伊予管内)で種粃を一括管理しようとする全農と、単価が安定した種子生産に取り組みたいという集落の意向が合致し、平成6年から種粃栽培の取組が始まった。

平成7年には栽培管理の徹底や肥料、農薬を統一させるなど、高品質安定生産に取り組むため、専業農家11名を含む19名で種粃部会を設置した。

部会では栽培技術の向上に取り組み、愛媛県が育成した水稻の品種「愛のゆめ」においては県内作付け種子の38%(173a)、麦「ヒノデハダカ」の種子では100%(151a)を生産するなど、県下でも優良な主要種子生産産地となっている。

種子の収穫は、種粃部会が所有する専用コンバインにより作業受託を行っており、作業の合理化と低コスト化が図られ、種粃単価が高いこともあり収益率の高い水田農業を実現している。

イ 後継者の会(構成員:25人)

集落には、他産業に就業している農家子弟が多くおり、その多くは退職後に農業就業を考えている。これらの者を組織化し、就農直後から集落の農業の担い手として活躍できるよう集落全体で育てていこうと、平成22年に設置した。

集落の篤農家や農協・県等指導機関の職員を講師に招いての研修会や、年長農家との交流会を行っている。集落の農業振興の方針が共有されるとともに、集落の農家と顔なじみとなって昔からの集落内の約束事等が伝えられるなど、次世代へ農業基盤が円滑に引きがれるよう取り組んでいる。



写真2 後継者の会

ウ ひまわり栽培への取組

条件の悪く耕作放棄地になる可能性の高かった水田で、町花のひまわりを栽培し、収穫した種子を搾油して地域の文化祭で販売したらどうか、との意見が出て、平成7年から中川原生産組合による栽培が始まった。周辺住民などから景観がよくなったとの評価を得て、年々栽培面積を拡大し、当初の10aから40aとなった。今では、非農家を含む集

落全体の取組となっており、町内の他地区にも栽培が広がっている。

ひまわり油は80リットル搾油でき、油は、町内の保育園や文化祭の出店の天ぷら油として利用している。使用後は回収し、バイオディーゼル燃料に精製して松前町の公用車で使用している。

こうした中、平成12年から中川原集落でひまわり祭を開催し、自治組織の学芸発表から子どもの写生大会、農産物販売まで幅広い内容で農家と非農家が交流を深める集落の一大イベントとして定着している。



写真3 写生大会

(2) 農事組合法人中川原(組合員:41人)

ア 集落の担い手となる法人の設立

平成18年、中川原生産組合は集落の全農家に農業の現状と将来についてのアンケートを行った。結果、①稲作機械の更新等設備投資が経営を圧迫、②高齢化・後継者不足による農業継続が困難、③経営規模が小さいことによる国の政策への不適合、等の問題が明らかになった。解決のために検討を重ねた結果、個別経営体の新たな担い手の確保は難しいことから、「集落農業の維持・発展と農村環境保全に貢献する」ことを経営理念とした集落営農型の農事組合法人中川原を平成20年に設立した。

法人は農地10haを集積し、水稻(4ha)と種子栽培に取り組んでいる。また、「後継者の会」の会員をオペレーターとして雇用し、実践的な農業技術を習得させる役割も担っている。

イ 環境保全型農業への取組

環境に優しい米づくりを実践するためにエコファーマーを平成22年に取得し、化学肥料や農薬の使用を低減するために栽培試験に取り組んだり、効率的な農薬散布実践のため病害虫発生予察を活用するなど、栽培技術の高度化に熱心に取り組んでいる。

ウ 消費者への直接販売への取組

生産した米は全量、集落内の新規住民(非農家)や松山市内の消費者70名に全量予約制で販売している。また、知的障害者更生施設やデイケアサービスへの販売も行っている。消費者となった新規住民は、自ら育んだ環境で栽培された納得の米として、口コミで松山市等の消費者に広めている。

その他、「中川原米」のファンを増やしていく取組として、新規住民に対して市民農園としてのほ場の開放や、家庭菜園の栽培講習会等も行っている。

エ 小学生への環境学習活動

子どものときから水を大切にすることを考えてほしいとの思いから、「中川原探索」と

題して小学生を対象とした学習会を主催している（平成21年：小学5年生～年生13人参加）。学習会では、中川原の歴史や文化、先人たちと川や水との関わりなどを教えている。

小学生は夏休を利用して集落を流れる水路や湧水池を調査し、これらの学習結果をまとめ学校や地元の文化祭で発表している。



写真4 湧水池での中川原探索

(3) 中川原農用地利用改善団体

集落の担い手である農事組合法人中川原と認定農業者へ農地が円滑に集積するよう、当該法人の設立と併せて平成20年に設立した。

団体では、地域の実態調査、合意形成、各事業などの方向性を検討し、農作業受委託の調査と標準作業料の設定をし、担い手への農地集積を推進している。

現在、地区の農地の20.9%にあたる18haを担い手に集積しており、集落内の耕作放棄地ゼロを達成している。

3. 生活・環境整備面における特徴

自治区の集落行事は各部会が連携して開催しているが、愛護部を通じ児童が、老人部を通じて老人が運営に関わっている。各種行事に関わることで住民同士のコミュニケーションが図られている。

近年、他産業に就業していた農家の子弟が定年退職の時期を迎えており、集落活動のけん引役となっている。これらの者は、新規住民と農家、子どもや老人など集落全体の絆を深める媒介としての役割も果たしている。

(1) 愛護部による各種行事の実施

集落での、ひまわり祭り、秋祭り、運動会、盆踊り、キャンプ等の各種行事は、子供会活動を担う愛護部が中心となって行っている。各イベントでは子供に何らかの役割（お絵かき、司会、研究発表など）を持たせている。

子どもが中心となる活動を行うことで、親だけでなく祖父母もついて来るようになり、新規住民も自然と集落に溶け込みやすくなる仕組みができています。

また、愛護部の部長は、必ず男性が行うこととしている。毎年部長は交代し、新規住民を含め、集落の男性の多くが愛護部長を経験している。

(2) リサイクル活動

集落の水と環境を守るため、住民全体の環境意識の向上を図り、ごみを減らしてリサイクルできないかとの思いから、リサイクル活動を集落全戸に呼び掛けた。説明会には住民の98%が集まり、合意に至った。活動は平成13年から開始されている。

当初は「新聞紙・雑誌・ダンボール」の収集から始まったが、現在は45種類（雑誌類、

厚紙、ダンボール、牛乳パック、紙管、古布、てんぷら廃油、缶（アルミ・ブリキ）、発泡トレイ（白・色つき）、卵パック、ペットボトル・フタ、びん（無色・茶色・その他の色）、乾電池類、蛍光灯類、金属類等）を取り扱うようになった。

「ゴミにするのではなく、費用をかけても全てを回収しリサイクルする意識を高めることが大切」として、活動している活動拠点は、集落内の空き地を借り受け、プレハブや廃材を利用した倉庫や作業場を設置した「リサイクルセンター」である。

作業は月2回、自治区14組が輪番制で行い、400世帯分の資源ゴミを分別して倉庫に整理・保管している。赤字を出さないため、資源ゴミは集落がトラックに積み込み引取業者に持ち込んでいるが、より多く積み込めるようにプラスチック等の粉砕機も自作している。持ち込んだ紙類は、「中川原」と印刷された紙紐となって戻り、紙類を束ねる紐もビニール紐を使用せずに、この紙紐を用いている。

収集した廃油は石鹼にして各家庭に無償配布している。石鹼は各家庭で利用され、好評を得ている。

最終的に、リサイクルセンターが必要でなくなる集落を目指しており、各戸からゴミが出なくなることを目的とした「リデュース」の取組も開始した。

このリサイクル活動は、全ての住民が顔見知りになれる集落の重要なコミュニケーションの場となっている。



写真5 リサイクル活動

(3) 農村環境美化意識の広がり

生産組合では、ほ場や水路の空き缶拾いを行っており、また、集落の全世帯が参加した農業用水路の草刈や清掃も年2回行われている。これらの活動から、水路にはメダカやフナ、コイ等多くの生きものが見られるようになっていく。

取組は集落外にも知られ、松山市の知的障害者更生施設から、働く意義や喜びを感じるため清掃活動に参加したい、と申し出があり、入所者と一緒になった活動が広がっている。



写真6 水路の清掃活動

(4) 村芝居「ひよこたん一座」の活動

「ひよこたん一座」は、戦後まで集落で行っていた村芝居を平成8年に復活させた一座である。毎年、集落の文化祭などで、地元中川原を題材にしたオリジナルの台本を基にした現代喜劇を公演しており、観客は250人を集めるほどの人気である。娯楽とともに

ストーリーを通じて集落意識の共有を図る場である。

(5) 高齢者福祉活動

集落では高齢者を大切にする思いから中川原サロンを設立している。サロンは、70歳以上の独居老人が会員となり、毎月1回公民館で交流会を実施している。

交流会は、独居老人の安否を確認する意図もある。世話は老人部や地域の女性が行っており、交流会では、農事組合法人中川原が生産した米を提供したり、村芝居（ひょこたん一座）の公演も行われている。